和裁基礎技術の評価の分析

＜研究者＞金子真希（代表）、潮田ひとみ

東京家政大学ヒューマンライフ支援機構
プロジェクト研究助成費

東京家政大学の前身である「和洋裁縫伝習所」は、和・洋裁の裁縫を教授できる人材を育成することを目的として創設された。

TOKYO KASEI UNIVERSITY

裁縫教育の現状

- 服飾美術学科では、これまでに多くの家庭科教員を養成してきた。
- 現在の小学校・中学校・高等学校の家庭科の時間は少なく、学ぶ内容も多岐にわたっているため、裁縫を学ぶ時間はとても少ない。
- 服飾を学ぶ学生も、裁縫の基礎技術を学ぶことから始める。

和裁研究の意義

- 技術の伝え方や評価基準について、和裁の技術が未熟な者にも明確に示すことができれば、技術継承や家庭科教員養成、被服教育に活かすことができると考えた。
- 教員養成の視点と、技術者の視点の両面から裁縫技術をとらえ、様々な場面で活用できる評価基準や評価指標が必要であると考える。

これまでの研究結果

- 和裁専門家と和裁を学んだ大学4年生とでは和裁技術の評価基準に差があるのかを把握するため、官能検査を行った。
- 縫い目試料の条件：

  ①縫い目の直線性、②縫い目の曲がり③針目のばらつき、④糸こき、⑤勘（感覚）
- 糸こきの判定

  和裁士：伸縮性等の素材の性質を考慮して糸こきの判定を行っている。

  学生：糸こきの良し悪しが、判定できていない。
- 針目のばらつき・縫い目の曲がり

  大学4年生は、合否判定ができることがわかった。

目的

- 大学1年生を対象に調査を行い、和裁未経験者がゆかた製作を経験することで、和裁における「縫い目」の評価に現れる変化を分析した。
- 針目のばらつきや縫い目の曲がりに対する判定基準がどの段階で養われるのかを把握することを目的とした。

方法

- 和裁経験のない大学1年生を対象とした、アンケート調査による縫い目の官能評価

調査期間：2023年4月～5月，7月

- 合格・不合格の評価については、合格5点、不合格0点として平均値を算出し、4年生の調査結果との比較した。
- 順位評価について、4月と7月の順位結果の分布を比較した。

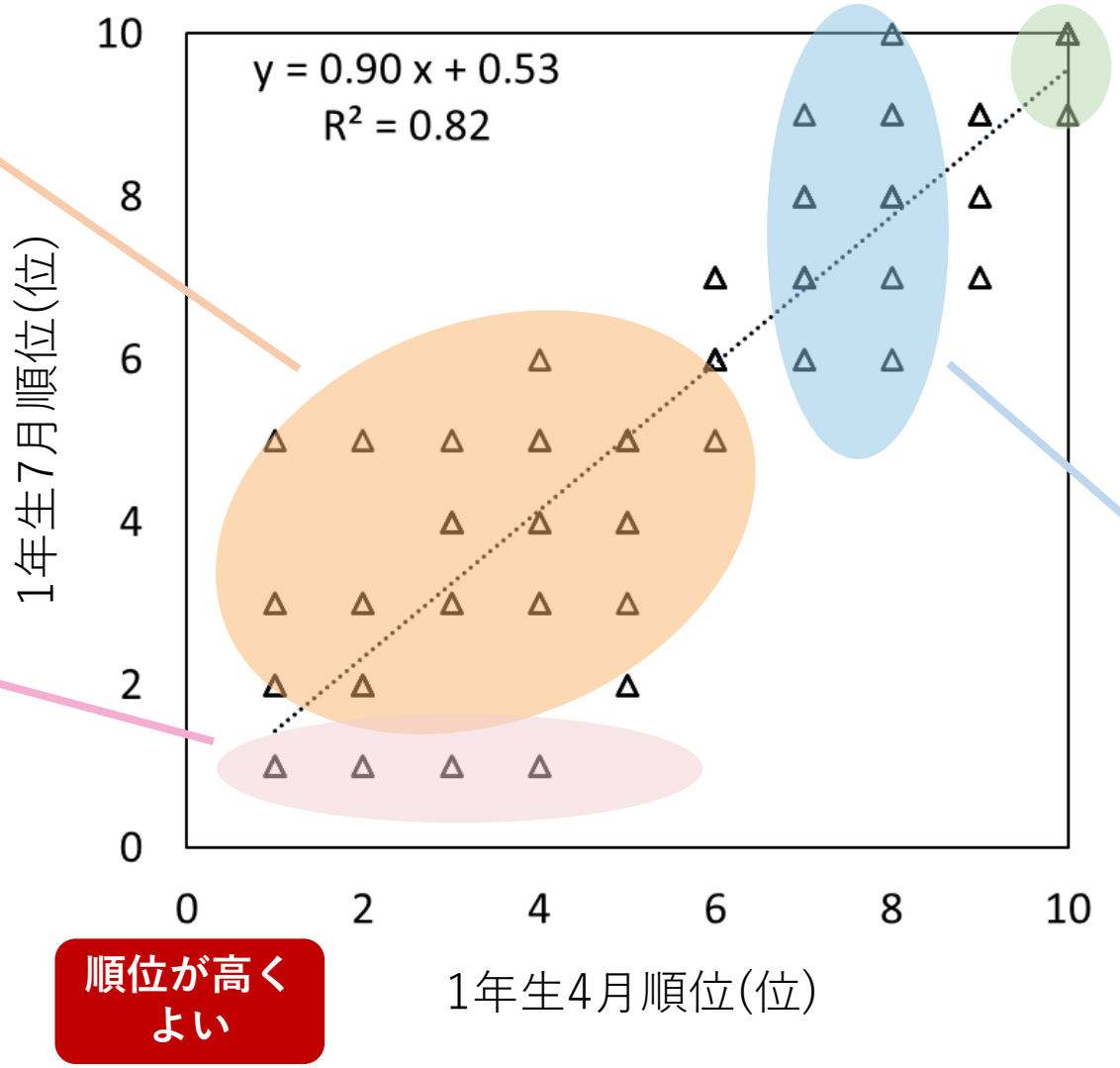
東京家政大学ヒューマンライフ支援機構
プロジェクト研究助成費

結果

TOKYO KASEI UNIVERSITY

問3-1　綿布 順位　n=90

順位が低くわるい



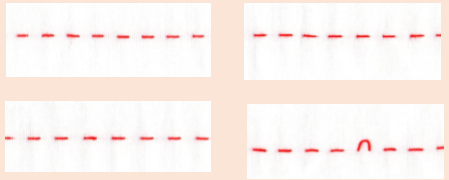
順位が高くよい

大きな分布

評価基準にばらつきがある。試料の違いが判定できていない。

学生は認識できない

糸こきの違い



横長の分布

学習（製作経験）により同様の評価指標を持つことができた。

針目の均一さについての判定の精度が上がった

合格

小さな分布

評価に変化がない。

細かい曲がり

不合格

縦長の分布

学習（製作経験）により評価がばらついた。
経験を踏まえた独自の評価指標ができた。

緩やかな曲がり
針目のばらつき

判定が甘くなった

まとめ

TOKYO KASEI UNIVERSITY

✓ 大学1年生は、直線性の高い縫い目や針目のばらつきについては，学習前から認識できる.

✓ 縫い目評価で優先されること

1. **縫い目の直線性**
2. **針目のばらつきが少ない**
3. **曲がりについては，細かい曲がりは不良であると認識され，緩やかな曲がりは独自の評価基準により判定される傾向にある。**
4. **糸こきは，大学1年生は認識できていない．大学4年生は、1年生に比べ認識できる傾向がみられるが、評価できるとはいえない。**

今後の展開

✓ **習得までに十分な経験が必要な「糸こき」の評価が容易にできる方法を見つける。**

謝辞：アンケート調査にご協力いただきました学生のみなさまに深く感謝申し上げます。
東京家政大学ヒューマンライフ支援機構のプロジェクト研究助成のご支援に感謝申し上げます。